

『華嚴經』の放光の解釈と李通玄の特徴

陳 永 裕

1. はじめに

『華嚴經』では代表的な 10 番の放光は、主に眉間白毫の放光、如来足裏から膝までの各ヵ所における放光、そして齒光と口光である。これは、放光により如来の真の存在を現わそうとしたものである。如来の足下からの放光で、法に近づく昇進の意味と、如来の衆生への説法を齒光と口光で象徴化したものである。この光明の作用を通じて『華嚴經』の教法である、相即相入と円融無碍の意味を現わしたといえよう。また、放光は如来だけではなく、「入法界品」においては、善財が訪ねた獅子頻申比丘尼もまた、放光にて法を説き、女性善知識と正趣菩薩、地神なども放光で法を説いている。

本論文では『華嚴經』における光明に対して特別な解釈と意味を与えている李通玄を中心に検討し、李通玄の影響を受けている、仏光三昧觀の形成についても見るつもりである。

2. 『華嚴經』の各品における放光の意味

『華嚴經』は、地上法会と天上法会の 2 つに分けられる。その第一番目の代表的な放光は、初会菩提道場の 6 品中、「如来現相品」での二度にわたる放光で、齒光と眉間白毫放光である。この「如来現相品」における放光について智儼は、これは如来の身業と口業を通じて、大衆の信心を促すための行為であったという解釈をした。また、眉間の光明が再び如来の足下に収まったのは、体用と因果の円融を現わすものだと話している。法蔵もまた、師匠の解釈を踏襲し放光の 4 意を説いたが、現相表実、驚起信心、照触救苦、為集衆遠召がそれである。次は、初めて普光法堂会で 6 品が説かれた時のことである。とりわけ、「光明覺品」で世尊が、両足輪下に百億光明を放ち、限りない宇宙とすべての存在の現象をその光明の中に浮かび上がらせる模様を書いている。「光明覺品」における光明は、

東西南北上下左右に揺れ動く中、光明を媒介にして一と全体が互いに疏通し合い混融無碍すると述べられている。この「光明覚品」においては、光明は単なる莊嚴や如来の神力としての意味を脱し、時空を越えて縦横無尽に円融無碍と相即相入の教義を掲げている。

靈弁の『華嚴經論』「如来光明覚品」解釈では如来の常果法身の不思議無碍で一切世間を摂受することを光明開覚と定義する。そして、この法身智力に十種があるといって、法身常住、救苦說法、普応世間、法身如実、隨器出現、智身寂滅、常恒清淨、智照自在、大悲拔苦、普應無碍などの十義で放光の意味を解釈している。また、靈弁は如来が面門眉間で放光することは普く世間に開示し普應するためであり、両足相輪の放光は下に群生を摂受するためであると註釈をしている。彼れは「光明覚品」の放光を十信に対応させていないのが特徴である。

天上では、初法会である忉利天会で6品が説かれる。その第2の「須弥頂上偈讚品」で、世尊は二つの足指から放光するのだが、これは世の闇を除滅するための慧光であると、經典は説明する。この放光に対して、智儼は足指からの放光は、解位に立ち退かないことを現わすと解釈する。法藏は、足指からの放光は地面を踏んでしっかりと立つように、菩薩の十住を表現し後退しないことを意味するという。李通玄は、放光の部位ごとに意味を与えている。つまり、「光明覚品」の両足輪下放光は十信の法を示し、「須弥頂上偈讚品」の足指端放光は十住の法、十行は足趺放光、十廻向は膝上、十地は眉間白毫放光など、法位の昇進を示すと説明している。そして、如来の足指端からの放光は、十住の境地から身心に智慧の宮殿へ入ることで、聖位に入る最初の段階を足指の放光で現わしているという。

次は「夜摩宮中偈讚品」で世尊は、両足の上より光明を放っている。智儼は、先の「須弥頂上偈讚品」の足指端放光は、住の法門であり、この品では行の法門を現わすと注釈する。澄観は足上放光を、足元の動く模様から意をとり、信解に頼った実践の動作を現わす放光と解釈した。李通玄は、前述の放光解釈に加え、十行法門を現わす足趺放光は、菩薩行の次第昇進を意味するもので、世尊の法光は、数千数万の妙色光明が階位ごとに次第に昇進する様子を現わしたものと見た。つまり、足下、足指端、足趺上などの光明はすべて、所行の行法を示していると解釈する。次に「兜率天宮偈讚品」で両膝輪放光が放たれた。兜率天宮に仏が姿を現わすと、兜率天の百万億の莊嚴相と眷属天王らは、清淨かつ信解の心で各世界のすべての仏を讃える。世尊はこの讃嘆に応えるかのように両膝から放光する。智儼はこの放光の意味を、法身の境地から仏の境界に一段と踏み込んだ、殊勝で

(66)

『華嚴經』の放光の解釈と李通玄の特徴（陳）

微妙な境地を現わす光明だと解釈する。法蔵もまた、膝は屈申進趣の作用を現すため、「廻因向果」の進昇の姿を語るものだと解釈する。澄観は、法蔵に付け加え、屈申進趣の模様であると共に、悲智が相導した屈申無住を現わしていると解釈する。李通玄は、十廻向法の両膝輪放光は、人が立ったり、座ったり、身を翻して曲げたり、広げたりする自在さを意味するもので、十廻向の法門は、俗處を省み真解脱の無染の大智を現わすもので、悲願で衆生を救うためのものと解釈する。つまり、生死に関わりながらも、涅槃の世界に身をおき、涅槃に佇みながらも生死に関わらない、自由自在さを現わす光明と解釈している。次に、天上法会での最後の放光として他化自在天宮での「十地品」放光がある。「十地品」では、世尊が眉間から菩薩力焰明という清浄光明を放出する。そして、十方諸仏も同時に眉間放光し、その光明が雲のように虚空に集まり、光明から仏讃嘆と十地法の尊さを偈頌で説いている。智儼は、この部分を仏の加被ととらえ、身光の加被と口光の加被に分けている。他化自在天宮での放光は仏力の分齊と加被の説法を説くための放光と解釈する。法蔵が光明を、身加と口加に二分して考えたのは、師匠智儼の解釈を踏襲したもので、これに意加を加えたのは、世親の『十地経論』によるところである。十地法門で大智慧光明三昧の定の境地を意力と言って意加に対応させており、法蔵は十地終心の際、仏位を得るものを、一切仏が一切智光を放ちその光明が菩薩の頭頂に入っていく様子は、この姿こそ受記を受けることだと解釈している。澄観は、眉間の放光もまた中正の道を現わすもので、光明の体用に光明の6業を挙げて解釈している。

最初の普光明殿での法会以来、天上法会を終え、再び如来は地上の法菩提場中の始成正覺された普光法堂に下り、会主として「十定品」など11品を説いている最中、二度にわたる放光を見せた。この会處で最初の如来放光は「宝王如来性起品」、つまり「如来出現品」からであった。この品では、光明を放つ如来と法を請する請主としての如来性起妙徳菩薩が登場し、また、如来に代わって法を説く普賢菩薩が登場する。そして、初会菩提道場での場合と等しく眉間から光明を放つ。そして、その光明の名は如来出現とっている。如来の眉間から出た如来出現の光明は、無数の光明と眷属になり、十方の虚空をあまねく照らす。また、その光明は菩薩を悟らせ、すべての悪道を消滅させ魔軍の群れを隠し、その代りに、如来の正覺の姿を示すと、この「如来出現品」の代表格である如来性起妙徳菩薩の額の中に入ってしまう。菩薩の額に入ったこの光明を法蔵は、如来が請主を加被した光明だと言い、如来の口から出て普賢菩薩の口に入った口光は、説主

を加被した光明だと解釈する。この口光の名は無碍無畏である。この口光のことを法蔵は、教道の伝通を示したもので、光明の名を無碍としたのは、弁才無礙と言説自在を意味し、無畏は深い真理に対して恐れがなく、また、大衆に対する恐れもないとしている。智儼は、この放光について、8種の意味で解釈したが、これは世親の『十地經論』での光明解釈における「八種業二種身」に起因するものだ。請業、因業、敬業、覺業、止業、降伏業、示現業、卷舒業がそれである。法蔵は最初、眉間白毫放光を「中道一乘法」「無漏白淨法」などと解釈し、澄観は、智儼と法蔵の注釈を収容し、さらに李通玄の解釈をも参考にしながらこの放光を解釈している。即ち眉間での放光は、二辺をなくした中道で無住の道であり、真応の二辺を離れたものと注釈する。「離世間品」では如来の放光はなく、「入法界品」では、一通りの説法が終わった後放光した。放光の意味は、すべての菩薩を獅子頻申三昧に安住させるため、普照三世法界門という名の光明を眉間白毫相から放ったのである。智儼はこの「入法界品」を、説法の手順を問わず、すぐにも放光の中に三世間を現わし、大衆の歩む境地がまさに正説であることを論ずるためのものと説明する。澄観は眉間から放光することで、この光明の名が普照三世法界門だということに重きを置き、光明の意味を、法界中道である無漏正智の体用と三世相即などから解釈している。李通玄は、「入法界品」の解釈において、法界の中で十分に法を説く教体として10種を挙げている。この10種の中の4番目を光明教体といって、如来が眉間光明で、三世と法界の諸法を顕現する際の教体として説明している。如来が法を説く方法である、神通、不可思議、虚空などと共に光明もその一つであるとしている。以上、『華嚴經』の放光の解釈について述べた。

法蔵は、「廬舎那仏品」から光明遍照を解釈し、これを身光と智光に分け、「光明覺品」でもこれを引き継ぎ、「身光は、事境を照らして大衆に一切の事相の無限さを悟らせるものであり、智光は、理境を照らして大衆に理相には差別がないことを悟らせる」と説明している。そして、この身光智光として唯一無碍光であり、光明のこのような動きは、すぐ信心を起こし法身と同体であることを悟らせ修行に没入させるものと見ている。つまり、自分の三業が如来と等しいと深く信じて修行に精進させるため、光明があまねく十方世界を照らすと解釈している。また、「賢首菩薩品」の放光に重要な意味を与えて「賢首菩薩品」の「見仏」という放光の解釈について、「西国法」を例に人が臨終を迎えようとすれば顔を西の方に横たえ、前に仏像を安置して旗を差し、仏像と臨終者の手をつなげ、口で

(68) 『華嚴經』の放光の解釈と李通玄の特徴 (陳)

仏名を唱えながら仏にしたがって往生しようという意を強くすれば、この臨終者も仏光を見ることができると見仏放光を解釈している。また、「樂法放光」については、樂法光を成就するための7因として、聴、説、書、愛、護、施、行の7法を挙げている。また、護法するためには、法の理に反してはならない護理法、法を実践し増長させなければならない護行法、教法を説くことを疎かにしてはならない護教法、そして悪王から三宝を護持する護果法などの4義を、命を惜しまず守らなければならないと解釈している。澄観は眉間の放光は二辺をなくした中道という既存の解釈に加え、「無住の道」として「無住」への導入であると解釈する。これは、『華嚴經』の「十行品」や「入法界品」に見る「菩薩の不住道」に加え、禪師としての澄観の無住観であるとも言える。また澄観は、李通玄の解釈を引用し「如來出現品」で菩薩名である性起妙徳は、文殊の大智として能顕にあたり、説主の普賢法界は所顯にあたると言っている。つまり、文殊と普賢によってビルシャナが出現するという華嚴三聖思想に即した解釈で、光明で加被する如來と請主である妙徳智慧、説主である普賢法界をもって放光を解釈している。これは後に澄観の『三聖円融観門』として完成された。

3. 李通玄の放光解釈の特徴

李通玄は、放光の解釈において独歩的だ。彼は『華嚴經』を十処十会の法門で見ると、十処十会の法門がみな普光明殿の法門に含まれると主張する。またこの普光明殿を、一真法界における報居の殿堂として見ている。すなわち、華嚴法門全体を報土の法門として見ているという意味である。「如來現相品」で、齒光と眉間光に対する解釈として李通玄は、眉間の放光は十地智果の光明であり、その光明が足裏に入ったことは十信の位を現わすと話している。また、他化自在天宮の「十地品」での眉間放光は毘盧遮那の放光と見ている。李通玄は『華嚴經』全体を通して、10回にわたる放光を意味深く観察している。まず、「如來現相品」の注釈に次ぎ、『華嚴經』の表法と集衆のため10の放光を挙げて説明している。特に「如來隨好光明功德品」の放光を、五位に進修する放光としてだけでなく、衆生の機根に応え常に光明を灯す、衆生を摂化する光明として特別に評価している。これは、後に10種の放光を取り上げる際にも明らかにしている部分である。李通玄の放光解釈で結論にあたる部分は、如來自身の表法放光で、10回の放光としてまとめている。第1回目の齒間と眉間の二度の放光は、結果を挙げ因行を成就させるための入信放光と言う。第2回目の両足下放光は、信位を成就した十

信の果光で、仏果の円満を信じる地位を示したものである。第3回目の如来足指端放光は、内位に入って聖道に上がり、仏家に生まれ聖行を実践するなどの初入にあたる放光で、十住位放光のうち聖位に入るための初段階の放光であるとしている。第4回目の如来両足趺上放光は、菩薩が空行を実践する位としての放光である。第5回目の如来膝上放光は、十廻向大願放光で、理事と智悲が混融無碍して卷舒が自在な様を現わす放光である。第6回目は他化自在天宮の眉間放光で、最初の眉間光明の名は一切菩薩智光明で、第6回目のものは、菩薩力焰明の光明である。この二つの光明は、互いに因果相似しており、根本智と後得智の無二と不異を現わす放光と解釈される。つまり、菩薩の階級、大悲、時劫、普賢行などの不異を現わす放光というわけである。これは、「十地品」の六相円融に代表される。李通玄は、第6回目に次ぎ、第8回目と続いたが、これは、『華嚴經』そのものから見れば、第7回目の重普光法堂会での「如来出現品」の放光にあたる。如来が眉間から放光して文殊に灌頂し、再び口光で普賢に灌口した。つまり、如来の光明は文殊の額と普賢の口へ摂入された放光である。これを李通玄は、文殊の理の妙慧と普賢智の行用で解釈している。そうして、文殊の妙慧と普賢の寂用が組合わさり、文殊は如来法身を意味し、普賢は如来大智を表して、諸仏はこの二法で仏果を成すと解釈するのである。この解釈は、澄観に至っては「華嚴三聖円融」思想に完成されて行く。第9回目の放光で、再び第7重普光法堂会での「如来随好光明功德品」を挙げる。李通玄は、各法会での代表的な放光の他に、この「如来随好光明功德品」で、宝手菩薩との話の中で如来が菩薩として兜率天宮にいた頃、光明を放って地獄衆生の苦痛を絶ってあげた話などが絡んだ放光を挙げる。この如来の放光が悪道衆生の苦痛を照らすという意味で「大悲接俗の光明」と呼ぶ。また、第10回目の放光は「入法界品」の眉間放光で、三世法界をあまねく照らして三世が、また一時であることを現わす光明だと定義している。これはつまり、文殊の法界理として、普賢の法界智に合一して理智の妙用が一仏門を成し、この一仏門で群蒙を教化し、法界一家を成すというわけである。

また、李通玄の放光解釈は、修行時の十信に始まり、正覺に至る全体修行の過程を対応させ叙述していることが特徴である。光明と修行階位との対応は、法蔵の解釈で最初に見られたが、徹底的な対応は李通玄に至って完成した。『華嚴經』の教義解釈において、力強い実践の強調は、高麗の知訥と日本鎌倉の明恵に多大な影響を及ぼした。知訥は、李通玄の『新華嚴經論』を節要し『華嚴論節要』を著した。李通玄が光明解釈において、もっとも重要視したこととして「光明覺品」

(70) 『華嚴經』の放光の解釈と李通玄の特徴 (陳)

の光明への十信の対応を重んじていることはすでに指摘されている。これは、高麗の知訥が『華嚴論節要』の最後の部分で、一乗仏果とは十信初心にあるもので、煩惱が深重した凡夫には、初発の正信の心が一番の要門になると解釈したことも李通玄の思想をそのまま踏襲したものと見られる。明恵もまた、信心を中心に彼の修行法を確立している。彼の『華嚴修禪觀照入解脫門義』(以後『入解脫門義』)で、「通玄居士が肉身で白光を照らすのは、ひたすらこの觀力を頼ったもの」という言葉をはじめ、通玄の「光明覺品」の十信重視思想にそのまま従っている。『入解脫門義』は、華嚴の修行法として澄觀によって具体化された三聖円融思想を、明恵が、修行法として完成した文献だ。文殊、普賢、ビルシャナは教法でこそ別立しているが、大乘正信の境地から見れば、三位が一体であることを悟るのが、すなわち解脫に入った境地であり、仏光三昧觀の根本を確立したと言われる境地である。また、李通玄の光明修行法とは、まさにこの仏光三昧觀のことである。日本の明恵に大きな影響を及ぼし、明恵は、『華嚴仏光三昧觀秘宝藏』という著述を残している。明恵のこの二つの著書には、全体として李通玄による『華嚴經』「光明覺品」の解釈の影響が浮き出ている。李通玄によると、「光明覺品」での如来の両足輪下光明を解釈し、十信初心の重要性を強調したのが彼の特徴である。明恵は、仏光三昧觀の手始めを法蔵の『華嚴經伝記』で明らかにしている解脫禪師を挙げているが、仏光三昧觀の完成は、李通玄の「光明覺品」での光明解釈と見るわけである。また、この解釈で強調したのが、まさに十信初心に仏果を成就するという強い認識だ。三聖円融觀も一乗信心によって可能になり、仏光三昧觀も一乗信心によって成就するものである。したがって、李通玄の修行体系は、如来の光明を一乗の信心で觀照し、直に仏果の境地に進む非常に一直線的な修行徑路を強調した。高麗の知訥と日本の明恵がこれを受け継いでいる。ただ、明恵は、十信初心ではなく、十信終心の方に重きを置いていることを見逃してはなるまい。

4. おわりに

以上のように、『華嚴經』の放光について經典では、地上と天上の法会にわけ、地上法会での4回説法の6回放光、天上法会での4回説法の4回放光を中心に考察した。次に、このような『華嚴經』の放光に関する解釈者として智儼、法蔵、李通玄、澄觀を中心に考察した。

ここで、とりわけ注目したいところは、天上の説法は、十住、十行、十廻向、十地の段階を高めていく修行階位を、如来の身の部位が徐々に高まる放光で表現

したという捉え方である。説法場所として天上に上がったことも菩薩階位の高さを徐々に現わすためのものだという解釈も可能である。地上の説法場所として、もっとも重要な普光明殿を報土と見ている点である。光明の役目を重要視した李通玄は、四禪天と十方世界を総合したところが、まさに普光明殿であり、報居の都、または本居の報宅という表現を使用している。李通玄は、この普光法堂が信心を起こす最初の場所であると共に、「離世間品」を説いた場所として、究竟の仏果を遂げる普賢行の総決が、この普光明殿で行われたという意味も付与している。また、李通玄の「光明覚品」解釈を通じた信心の強調が、華嚴の修行法に深い意味を与えていることを考察した。（紙面の都合上、註記は省略）

〈キーワード〉 華嚴經, 放光, 光明, 李通玄

（中央僧伽大學校, 仏博）

掲載されなかった諸氏の発表題目（1）

「水たち」 āpas と「信」 śraddhā —古代インド宗教における世界観—

阪本（後藤） 純子（宮城学院女子大学付属キリスト
教文化研究所客員研究員）

都市構造の神話と理念

—『ラーマーヤナ』が描く都市と建築論書が示す都市の規準—

出野 尚紀（東洋大学東洋学研究所奨励研究員）

ジャイナ教における śīla と guṇa

奥田 清明（四天王寺大学教授）